

# 放送人の会

No. 35  
2008・2・8

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

TEL&fax 03-3221-0019 E-mail info@hosojin.com

代表幹事 今野勉 編集担当 磯村健二、伊藤雅浩、鈴木典之、長沼士朗、松尾羊一

## 単純なことの大仕事

今野勉

放送記者やディレクターのインサイダー取引事件であけた二〇〇八年。ちょっと重い気持ちでいたところに、追い討ちをかけるように、当会の創立期から幹事を担ってくれていた村木良彦さんの訃報である。

村木さんは、放送人の会の事業として、放送人グランプリを提唱し、これまで自ら運営をつとめてきた。

放送人グランプリは、放送人によって選ばれた放送人が受ける賞である。他どの賞にもない、放送人の会ならではの賞である。

これまで私はたびたびこの賞の授賞式のよさについて話してきたが、すぐれた番組を作った制作者に対して同じ仲間として敬意を表するとともに、同じ制作者として誇りをともにする場が授賞式と懇親会である。

さらに、同じ制作者として腹を割って本音を語れる打ち解けた雰囲気と、それは裏腹の、すぐれた制作者のもつオーラに触発される緊張感とがないまぜになるあの場を、私はこよなく愛している。制作者同士が顔を合わせる場をつくる、という単純なことを発想してくれた村木さんにあらためて感謝する。

単純なことといえば、村木さんの訃報を背に訪れた札幌での「名作の舞台裏―池中玄太80キロ―」でも、感じたことがあ

った。

会場の中年男性の観客からの「池中玄太のように生きたい」と思っている自分の生き方を決めてきた」という発言や、女性の観客からの「何かの困難に行き当たったとき池中玄太の生き方に励まされて今日まで生きてきた」という発言を聞いたとき、私は、テレビドラマと視聴者をつなぐ原点を見たように思った。

それは単純なことだ。人々を励まし勇気づけることだ。もちろん、ドラマにはもっとさまざまな働きがある。私たちは、ドラマの持つ深さや人間の複雑さについても知っている。そのことを追求するのももちろん大事なことに違いないが、単純なことの大事さもやはり胸にためておかねばならないと、あらためて思い知らされたことだった。

単純なことの大事さは、「名作の舞台裏」のあとで開かれた地元放送局のディレクターやプロデューサーとのフォーラムと懇親会で、さらに痛切に感じさせられた。

短い時間である。何をどうすればいいか、などの具体策など出る訳もない。しかし、放送人の会の人間と地元のDやPの人たちが顔を合わせる場ができたというだけで、私の胸には何か熱いものがこみあげてきた。

そして、札幌に住みながらお互い顔を合わせたことのないDやPが、お互いはいじめて名乗り合う姿を見て、こうした場を提供するのが放送人の会の役目である、とつくづく思ったことだった。

顔を合わせて何がどう変わるものでもない。だが、制作者が、地域をこえて組織を超え、年代を越え、国境をこえて顔を合わせるといって、その単純なことが、お互いの敬意と誇りと親近感と、そしてお互いの緊張感を生み出すのだということ、私は、年頭に確認することができたのである。

放送人グランプリは、もちろん、続けなければならない。地方での「名作の舞台裏」も、大変な手間ではあるが続けたものである。

単純なことが大事なことだ、と銘記しつつ…。

### 第5回 人気番組メモリー

#### 8時だよ！全員集合

日時・2月23日(土) 13時30分

場所・情文ホール

(横浜情報文化センター6階)

ゲスト・高木 ブー (出演)

豊原隆太郎 (演出)

山田 満郎 (美術)

司会 大山 勝美 (放送人の会)



# 名作の舞台裏 in 札幌 「池中玄太80キロ」

記・伊藤雅浩

放送番組センター・放送人の会 共催

司会 堀川とんこう

ゲスト 西田敏行 杉田かおる

坂口良子（以上、ドラマ出演者）

松本ひろし（脚本） 石橋冠（演出）

千歳空港に到着すると気温はマイナス

9度。太陽の光が雪に反射してまぶしい。しかし外に出るとさすがに寒い。一行はバスで札幌へ向かう。途中から雪が降り出した。雪の中をバスは100キロ以上のスピードで走り、乗用車を次々追い越して行く。雪道では大型車の方が安心してスピードが出せるらしい。雪の中で暮らしている人の苦労は

忘れて、暖かいバスの窓から一面真っ白の、枯れ木残らず花が咲くような雪景色を満喫した。札幌市内に入り、東札幌6条1丁目の札幌コンベンションセンターへ近づくとあたりは実に雪が深い。この中を客は来るのかと心配になった。客の出足は遅く、開会10分前

## 放送番組センターの立場から

専務理事 重定尚志

「池中玄太80キロ」を見たのは30年近い昔のことだったとは…

恋に落ち、妻が急死し、反発していた3人の連れ子たちとの生活が始まる。第1話での展開の速さに驚き、丹頂鶴の舞う場面とともに心に焼きついている。

「名作の舞台裏」が雪の札幌で開催された。懐かしい場面が再現され、この作品が作られた舞台裏が明かされた。豪華なメンバーを揃え、素晴らしい会場を設営された「放送人の会」のご努力に、共催させていただいた放送番組センターとしては、感謝とともに今後の対応に責任を感じている。

放送番組センターは、文化資産として放送番組を収集保存し、活用する任務を担っている。権利処理の問題や資金難で事業の展開が難しく、欧米の番組保存に比べ大きく遅れている。また、放送ライブラリーの番組は現在の取り決めでは横浜でしか見ることができないが、放送番組センターは全国の放送局の負担で運営されている。地方の展開をどのように図っていくかは大きな課題である。

地方局の番組は、日本全国の自然、環境、文化、人の営みを記録する貴重な文化資産であり、番組情報を含めできるだけ多くの番組を保存すること、また、全国で視聴できるようにすることを目指し、研究している。

昨年夏に実施した「テレビの青春！昭和30年代番組展」は、9月には長野で信越放送と共催で、12月から1月にかけては川口市のNHKアーカイブスで開催した。そして3月には大阪近鉄百貨店で巡回開催されるが、今後ともこうした展示や企画事業の全国展開を意欲的に行っていきたい。

「名作の舞台裏」の地方展開は放送番組センターとしても大きな課題であった。毎回数千人の参加申し込みがあるが、横浜情報文化センターでは200名強しか入場して頂くことができません。毎回抽選で外れた方々には申し訳なく感じてきた。今回は大きな会場を設営していただき、希望者全員が参加できたことは、この催しの意義にかなったものと嬉しく感じた。

制作者フォーラムでは、地方局の製作現場の厳しい実情が話され、「放送人の会」の人々とともに熱い討論の場となった。今回の開催は地方展開のきっかけとなり、今後に期待をつないだが、遠隔地での開催には資金面を含めて大きな課題がある。放送番組センターとしてどのような協力ができるのか、「放送人の会」の方々と話し合いを進め、有意義な取り組みが出来るよう努めたい。



雪降る中、会場に急ぐ西田敏行さん

で客席はほぼ半分。「札幌で出足が遅いのはいつものことで、そのうち増えます」と地元の人が言うので不安半分、期待半分で客を待った。最終的には客席は3分の2が埋まった。

開会に先立って、主催者側として放送番組センター、放送人の会、札幌コンベンションセンターからそれぞれ挨拶があった。放送番組センターの重定氏から上記のような原稿を頂いている。

ホールのステージは広い。大編成のオーケストラが悠々演奏できる。そのステージ奥のホリゾント前に大スクリーンがあり、「池中玄太80キロ」の第一回放送分が上映された。

超望遠レンズで鳥を撮影する玄太（西田敏行）。実に若い。珍しい鳥が撮影できたこと自慢げに見せに行く鳥学者が宇野重吉。これも高齢ではあるがまだまだ若い。「これは珍しくない。ルビタキのメスじゃよ」と言われ「そんなバカな…」と反撃しようとする



すると丘みつ子(役名・鶴子)が登場。これがまたハツとするほど美しい。西田敏行は途端にデレデレ。舌打ちする宇野重吉…と畳み込むテンポでこれまで約2分。玄関での挨拶もなく、いきなり居間に上がりこんで話が始まる感じのドラマの展開、超望遠の美しい映像と短いカットの小気味いい編集。石橋演出のスキルは既にこのとき完成の域に達している。

司会・堀川「私はこのドラマが放送された1980年にTBSの編成にいましたが、このタイトルはショックでした。ホームドラマのタイトルは愛とか心とかおおかあさんとか、そんな意味の言葉が入るのがそれまでの常識でしたから」



堀川とんこう氏

石橋「編成には奇妙なタイトルだ、ボクシングの選手紹介か?とバカにされました」

松木「脚本家としては何度も出てくる名前を書きやすい方がいい。『玄太』は楽です。」



松木ひろし氏

当時、ワープロはなく、原稿は手書き。台本はほとんどガリ版印刷だった。

玄太は鶴子に求婚する。

鶴子「いいんですか?子どもがいますよ」  
玄太「一人なら手間が省けていい」  
鶴子「一人じゃないんです」

玄太「どんな障害も乗り越えてみせます!」と結局3人の娘を持つ父親になる。長女絵里が杉田かおる。妹2人と協同して玄太に反抗する。

石橋「あのと16歳だったんだね」

杉田「ホンが全く読めていなかったんです。何を考えるのかわからなかった」



杉田かおるさん

石橋「子役たちの機嫌がいか悪いか、まわりが気にして、こわがっていた」

杉田「和気藹々じゃない方がいいと思っていました。みく(次女・小5・有馬加奈子)もやこ(三女・小1・安孫子里香)もプライベートと仕事の区別がつかないところがあって、年上の私はビシツと言った。緊張感があるのがいいと…」

石橋「大人になったね」(笑)

玄太は通信社のカメラマンである。上司が長門裕之。事件があれば現場へ駆けつけ、いい仕事ができないとすさまじい口喧嘩。

堀川「あれはアドリブですか?」

松木「そうです。リアルさを引き出すため、科白は書かずただ『ケンカ』と書きました」

石橋「凄い悪態を二人とも発明するんです。」

ベトナムカボチャとか、ムチャクチャなのがいろいろあった」

堀川「西田さんの髪も毎回工夫があったんでしょう?」

西田「ピアノの夢を見て、髪が寝癖でピアノの形になったのがあったでしょう。あれはヘアメイクが大変で1時間半かかりました」



西田敏行さん

堀川「西田さんは主役はこれが始めてです。この番組がその後の私の俳優生活を決定した」

思います。」

同僚が三浦洋一(故人)、坂口良子、飲み屋のおかみが松尾和子(故人)、このとき女優初体験。間借りしている家の家主が丹阿弥谷津子(故人)。若死した人が多い。坂口「三浦洋一は同志みたいだった。魅力的だね。プラトニックだけど恋をしていた。」



坂口良子さん

坂口「みんなが三浦洋一に恋していたのよ。これが彼の代表作だと思う。」

石橋「松尾和子を『おっかあ』と呼んで入り浸り、『再会』を歌って、としつこくせがんでいた。」

西田「三浦のお葬式の時、良子泣いてたな。惚れてた?」

坂口「……」(笑)

玄太と鶴子のあわただしい結婚式の後、娘たちの反抗で新婚旅行も家族旅行もなし。玄太は休暇を貰って北海道へ丹頂鶴の撮影に行く。雪の中の鶴の求愛ダンスを撮影する玄太のところに鶴子危篤の連絡が来る。泣き叫びながら走る玄太と飛翔する鶴の美しい映像がクロスして切ない。

石橋「あの鶴の撮影は札幌テレビの安積カメランにお世話になりました。阿寒湖です。当時は300羽くらい、今は千羽以上になって現地では困っています。」

結局鶴子は結婚後半月で急逝。残された娘3人は一度は鶴子の親戚が一人ずつばらばらに引き取るが、娘たちは一緒に暮らしたいと玄太のところへ戻り、血のつながらない娘3人と玄太の暮らしが始まる。

これを第1回放送で全部やってしまった。物凄く早いテンポ、あつという間にお話が進んでいる。

松木「実は3回分だったんです。それを見せたら石橋さんは『これ1回にできないか』と言いい、そりや仕方がないから1回にしましたよ」

石橋「おぼえてやがれ、と言われました」

松木「そんなこと言いましたかねえ」

石橋「第1回は16分切りました。かなり無理しましたがそれが成立するテンポだったんですね」



堀川「西田さんの演技のリズムはそれまでの日本人と違う。それで物語は日本人そのものだけど番組はひどくバタ臭い」

石橋「どこかジャック・レモン風です」

札幌の会場では、第1話の後、第2部の、数年後玄太が坂口良子と再婚。杉田かおるの長女絵里が結婚する話を上映した。

玄太は「話がある」と絵里を自分の部屋へ呼び、正座して「絵里！絵里には本当に世話になった。ありがとう。」と言って泣く。絵里は「それじゃわたしの言うことがなくなる」と言って泣く。

いがみ合っていた血のつながらない親子が愛し合って生きていくという物語なのだ。

坂口「あの時私は25歳で、結婚もしてないのに3人の娘の母親なんてどうやればいいのか皆目わからなかった。」

杉田「私は父親がないから、この番組で父親をプレゼントしてもらいました。私の一生の宝物です。」

石橋「ぼくにとってもこの番組は宝物です。ぼくはこの番組を作るためにテレビ局に入り、ディレクターになったのだと思います。この番組がやれて本当によかった。制作者としてしあわせです。」



石橋 冠氏

会場の観客との対話の時間になって観客席で男性の手が挙がる。

「私は池中玄太のように生きてたくて、福島で重度障害者のためのNPO法人で仕事をしてみました。そのときは西田さんに来ていただいたことがあります。今は北海道で重度障害者の施設で働いています。」

西田「そうです。あなたの生き方が池中玄太そのものですよ。がんばってください」

質問「西田さんは映画にも多く出演なさっていますが、テレビと映画は違いますか？」

西田「テレビはお茶の間のものですからちよつとお行儀を良く、と気をつけます。映画は映画館の暗い中で見ていただくので、少しハメはずしてもいいかと…」

質問「息子が池中玄太のように子連れの女性と結婚するというのですが…」

石橋「私の甥もそうです。弟にやめろ、諦めろ、女性は何にいくらもいと説得してくれと頼まれて甥に会いました。『おじさん、ぼくは池中玄太を見て育ったんだからね』と言われました。甥がこの番組を見ていたなんて考えていませんでしたから…。すぐ説得はやめました。近く彼は結婚します」

会が終わりに近づいて

堀川「西田さんにおねだりがあるんですが…歌っていただけますか？」と頼むと西田は快諾。カラオケが鳴り出すと立ち上がり、ステージの前方へ行き、身振りたつぷりで「もしもピアノが弾けたなら」を歌ってくれた。

もしもピアノが弾けたなら

思いのすべてを歌にして

きみに伝えることだろう

雨の降る日は雨のように  
風が吹く夜は風のように  
晴れた朝には晴れやかに

この歌は「池中玄太」第2部の主題歌で、西田敏行はこれで「紅白歌合戦」に出場し、「紅白」の司会もすることになった。

「池中玄太」のもう一つの主題歌でこれもヒットした杉田かおるの「鳥のうた」は会の前後に会場に流された。

杉田「2月14日、バレンタインデーに、NHKの『きよしとこの夜』で歌います。聞いてください」

会は大拍手のうちに幕。観客は関係者に「またやってください」と口々に言い、出口のアンケート回収箱のまわりに人が群れた。

満席の会場に集う観客の皆さん



満席の会場に集う観客の皆さん

「名作の舞台裏」のあとは場所を変えて地元札幌の放送局の制作者たちと放送人のかい幹事とのフォーラム、そして懇親会になるのである。

北海道へ そして北海道から

STVメディアP室専任局長 林 健嗣



前日の朝までに降り積もった大雪の雪かき仕事を終え、さらに降雪のなか足を運んで頂いた方々に、本当に感謝したい。札幌ばかりか、北見や旭川から、厳寒の中、遥々駆けつけてくれたのだから。

開催日の2日後、北海道新聞の西村記者が、参加者の声を代弁するように、小さな記事を書いてくれた。

感動的な初開催、次回開催への期待の文の後「地方の視聴者も、名作に出会えた喜びを作り手と分かち合いたいのだから。」と結んでくれた。

「名作の舞台裏」そして放送人の会、放送番組センターの「存在と活動」を知ってもらうことから始まった半年間。初老の放送オタクの再就職活動のような気分だった。しかし、放送文化を担っている者への期待と叱責を実感する日々でもあった。

振り返れば、東京で準備をする石橋先輩の方が大変だったことは確か。横浜開催の何倍もの心労を重ねたに違いない。

「名作の舞台裏」はもちろん、主催者に聞くことがらが周知されていない状況で、確かにPRは大変だった。こんな時、頼りになるのは「俺の目を見ろ！何にも言うな」という血縁・友人力。ここでも、札幌南高出身者である石橋氏の力がおおきな力と



なった。基礎票を固めるのは「石橋軍団」になるかもしれないと、地元的面子にかけて、ドブ板的な集客に出たのは開催2週間前からだった。

媒体を生業とする者としては、勉強になった。あらためて、東京から駆けつけてくれた幹事の方々に感謝したい。AIR-Gの中田さん、HBCの萬崎さんも、当日ボランティアとして活躍して頂いた。感謝！感謝！だ。また、放送ライブラリーの山田さんからは、「何か横浜から後方支援できないか」と何度もメールを頂いた。NHKおよび道内民放各社長へのイベント告知をして頂いたことは、後々力になった。

## △2008制作者フォーラム▽

さて、ダブルイベントの締めとなった「制作者フォーラム」は中田さんの動員力によるドロ縄式？開催だった。振り返れば今野勉代表から『舞台裏』の地方開催では地域の制作者との懇親会を是非実現したい」という言葉が発端だった。いわゆる型にはまらぬものになりたいと選んだ会場が良かったか、西田敏行さんの推薦に乗った、懇親会の「北海道しゃぶしゃぶ」が良かったのか。ダブルで、なだれ込むような進行を支えてくれた中田さんの腕と肩肘張らぬ放送人の会幹事の姿勢？が実のある心温まるものにしてくれたと思う。フォーラムもしゃぶしゃぶもうまくいったと自分勝手に総括した。

とにかく、北海道の制作者は、放送の先輩たちとの今回の出会いをきっかけに、何かを掴んでくれるはずだ。その確信がどこ

から来るかと言えば、開催日翌日から、制作者たちから「先輩たちは、なぜ、あんなにアグレッシブなんだ」という、自分が放送人の会に参加させて頂いた当初感じたものを感じてくれているからだ。

モノをつくることは、孤独がつくる花だという。その孤独な闘いを知る仲間だからこそ、「スキルはコミュニケーションのなかから生まれる」という当日の堀川とんこう先輩の言葉が効く。

さて次は北海道から放送人の会へ新メンバーの大量参加の報を持ち込みたい。そしていつか、北海道の制作者たちから、小さいが刺激的な火を送りたい。

## ラジカルであること

### ラジカルに生き続けること



札幌FM放送  
取締役  
中田美知子

「名作の舞台裏」が北海道で初めて開催できたのはひとえに石橋冠さんの情熱とS TVの林健嗣さんの行動力の賜物に他ならない。

1月26日札幌で取り上げた作品は「池中玄田80キロ」である。主演の西田敏行さん、坂口良子さん、杉田かおるさんという豪華ゲストに大雪の中たくさんの市民が会場の札幌コンベンションセンターに集まった。

鑑賞したのは、主人公が愛する妻と出

会って、結婚して、死別してグレして、それでも子供3人と暮らす覚悟を決めるまでを描いた第1話である。正味45分ほどの番組に、よくもこんなにエピソードを詰め込んだものだと感心する。そして今見ても色褪せていない。

西田さんがとても若くていらつしやる。上映会は、その後の玄太が娘の杉田かおるさんを嫁に出すエピソードが特別に編集して付け加えられて終了した。

タイトルロールが出た途端、観客席で見ていた杉田かおるさんが扉を開けて脱兎の如く飛び出した。見れば目を泣き腫らしている。出たところで観客の女性とすれ違った。「信じられない」。突然遭遇した女優に彼女は驚きの声をあげた。

ゲストによるトークも終わり、最後に西田敏行さんが「もしもピアノが弾けたなら」をカラオケで歌った。すべて内容は石橋さんの演出である。

帰りに会場から出て来る観客の顔を見た。年齢は40代から70代だろうか。みな頬を紅潮させながら出て来るのは、観客が制作者の熱気に直接触れたからである。

セミナー終了後会場を移し、放送人の会幹事のみなさんと、北海道のラジオ・TV各局から集まった人々とのディスカッションである。雑誌GALACや月刊民放で名前をしばしば拝見する方々が大半して札幌にいらつしやっただから、こちらの会場も熱かつた。短すぎる討論会と北海道名物「ラムしゃぶ鍋」の2次会も本当に刺激的だった。

週明け、私のメールには感謝を告げる言葉の中に「作り続けることの大切さ」と、前

に進む勇気を貰ったとの謝辞が並んでいた。

北海道大会を振り返って後悔といえなかった一つだけ言いたいことがある。どうしてもTVに寄ってしまいがちな放送人の会にラジオの専門家を増やして頂けないものか。そのラジオ出身の松尾羊一さんが2次会のべの挨拶で「私達の尻を乗り越えて」とおつしやっただ。こんな過激な挨拶がびつたり来る方はいない。

ご出席いただいた大山勝美さん、今野勉さんを前に司会をした私の口をついて出てきたのは「何故この方たちはいくつになってもアグレッシブなんだろう」と。聞いていた人々も釣られて笑った。でもみなさんは「積極的な」だけではない。そう、ラジカルなのである。常に急流を前に前にと進み続ける力強さを忘れない。変革を恐れないこと、ラジカルであり続けることを人々が誓い合った真冬の北海道でありました。



北海道放送界 女性制作者の皆さん



特集

年賀状、寒中見舞い

大山 勝美

子年は十二支の第一番目の年です。ことは初心に帰る精神で、と念じています。

川面染めて流れ行くなり初菫  
西川 章(阿舟)

田澤 正稔

句会、サボってすみません。

今野 勉

千支六巡の歳男です。心機一転、北海道にいる時間を多くして心身を少し透明にしたいと願っているところです。

◇映画の脚本 「丘を越えて」主演・西田敏行。今夏シネスイッチほか公開予定。  
◇テレビ 日中戦争の上海で暗躍した女スパイと家族のドキュメンタリーを制作中。

北村 充史

鼠(27年松竹)、ミッキーマウス・シリーズ(28年〜米)、鼠小僧次郎吉(32年松竹、33年日活ほか)、二十日鼠と人間(39年、92年 米)、沙漠の鼠(53年 米)、子の刻参上(57年 大映)、どぶ鼠作戦(62年 東宝)、日曜日には鼠を殺せ(64年 米)

がしゅん 08年 子年元旦

北村 美憲

たくさんのひとの温かい励ましに支えられて、ようやく一年を過ごすことが出来ました。ただしその間、内外ともに明るい話を何一つ聞くことが出来なかつたような気がします。

世界は、そして身近な日々の暮らしは、今後どうなっていくのでしょうか。若い先短いわたしのことはどうでもよいが、若い人幼い者これから生まれてくる人たちがどうするのか、ほんとうに気がかりです。

変わることにそ実体であり、限りがあつてはじめて存在の意義があると教えた、二千数百年前の聖賢たちは、まるで現代の行き詰まりを予見していたかのようです。しかし本当の危機は現在の方でしょう。

ご一家のご健康とご多幸をお祈りします。

堀川 とんこう

小生、昨春に古希の峠を越したのですが、良いことも少しありました。

連れ合いの高木凛著「沖繩独立を夢見た伝説の女傑〜照屋敏子」が小学館ノンフィクション大賞を受賞しました。「恋せども、愛せども」(WOWOW)が芸術祭で入賞、前作「祖国」に続いての受賞となりました。

夜の庭(熱海)で、蜜柑を食べに来た雌のハクビシンに出会いました。

大和 定次

昨年の5月、NHK教育テレビ「音楽のちから」のカマスター(音響効果)になりました。子供たちのパワーと若いスタッフの情熱に感動しました。このシリーズは通信衛星を使って、昨年8月から全世界に放送されています。

「放送人の証言」久野浩平さんに上手にまとめて戴き、ありがとうございます。

重延 浩

「心」という漢字は心臓の形から来ているそうです。「現代人は脳で考えていると思うのだが、古代インド人は心臓で考えていると思っていた」とは古代インドの研究者中村元さんのお言葉です。中村さんは心に三つの毒があるとも言います。貪る心(貪欲)怒り(瞋恚・しんい)愚かな迷い(愚痴) この貪・瞋・痴の三毒、今、たしかに現代社会にはびこっていますね。

これと戦うには、温かい心臓の情念、愛や慈しみ、信頼と尊敬の心で動いてみるのが、現代的生き方ではないでしょうか。それはとても素敵な動悸です。そのため、まず健康でありますよう、心からお祈り申し上げます。

鶴橋 康夫

満月に屈めば己が影の中  
東宝映画「愛の流刑地」、テレビ朝日「天国と地獄」。

皆様が、ありがとうございます。  
父母に空席ありや叙熱の日

秋には紫綬褒章を戴きました。皆さんのお蔭です。年賀状には、七福神の大黒様が勲章をぶらさげている絵を描いてみました。



荻野 慶人

劇場の客席や大学の教壇から「最近の若者は滑舌がダメ」と転嫁しながらわが聴力の劣化が気になる。あれやこれや下方修正やむなしだが「後期高齢者」と呼ばれるのは尚早…と不愉快!

老人力、鈍感力、快眠力、釈迦力…それにDVカメラを覗く阿呆力は自慢してもいいだろう!消費期限は未定として、品質表示は偽りたくない。

市岡 康子

昨年4月から東京でリタイヤ生活に入りました。ゆったりした時間が流れるのかと思いきや何かと気忙しく、夜やすむ前にその日の朝刊を読むような毎日です。近況II卒業制作と称して作った『カンボジアの神憑き』が、パリの民族誌フィルム、N・Yのマーガレット・ミード両映画祭で上映され、出席を兼ねて旧知に会ったり観光したり、一作で二度楽しめました。



山縣 昭彦

隠居3年格別に仕事。山形放送の「われら愛す」国歌・国民歌についての考察。幸いにも平成19年度文化庁芸術祭でラジオ部門大賞を受け、めでたく又のんびんだらりの田舎暮らしに戻りました。

高橋 一郎

4月12日放送、テレビ長崎の長崎・上海物語「月の光」(脚本・市川森一)を撮る予定です。

中沢 忠正

旧年中は大学の教師(テレビ論)なんかやって少々忙しい思いをしましたが、本年は仙人態勢に復帰のつもり。  
めでたさもほどよいとぞおらが春

坂元 良江

共生の暮らしも「松陰コモンズ」「コレクティブハウスかんかん森」とあわせて6年になります。貴重な体験をこれからのように生かしていくかが今年のテーマです。「課外授業 ようこそ先輩」(NHK)もおかげさまで10年目を迎えます。昨年は「小田実 遺す言葉」(NHKハイビジョン)を制作し、その間テレビマンユニオン創立の仲間、鶴野徹太郎さんを見送りました。彼らの遺志を大事に生きようと思うこの頃です。

岸田 功

傘寿 死ンデモふしぎデハナイ 生キ  
テモ珍シクモナイ 齢ニ成ツテシマッタ

村上 雅通

昨秋、精巣部分に腫瘍が見つかり治療を続けています。他への転移もなく、1月中旬には治療は終了することになりました。2月には完全復帰出来そうですが、非日常で得た「ゆとり」を大切にしていきたいと思っています。

日韓中フォーラム福岡開催に向けてがんばります。  
よろしくお願いします。

石井 清司

放送に関わって45年。脚本家を経てメディア評論に、この30年はジャーナリストとノンフィクション作家を二人三脚しました。時代、社会の流れと歩みを共にし、糸を紡ぐように文を時代の石板に刻んでいます。(中略)

次を託す世代はどうなのでしょう。戦後手にした筈の真の市民性と民主主義の輝きはどこへ行ってしまったのでしょうか。

近藤 晋

鼠が一匹、新しい会社を作りました。よく揃って練った企画を、と思います。  
(株)Shin企画、自宅営業です。

中崎 清栄

テレビ金沢にご縁をいただきありがとうございましたと感謝して仕事をしています。

加賀美幸子

1年を滔々と流れ続ける「大河ドラマ」が始まったのは昭和38年、私がNHKに入局した年であった。それから20年後、「峠の群像」で、ナレーションを担当したが、さらに20数年後、昨年「風林火山」とともに1年の大河を渡りきり、今、ほっとしているところである。

風林火山：そのリズムと響きに、つい口ずさんでしまう言葉だが、恐くもある孫子の兵法：「疾きこと風の如く、侵略すること火の如く」である。それを置き換えて「自在なること風の如く、温かきこと火の如く、深くあること山の如し」でありたいと願いつつ、祈りつつ、ナレーションをとり終えた。

### 北京の初日の出

中村美美子

雪は降らなかったが、足元から寒さが這い上がる。オリンピックスタジアム「鳥の巣」を見下ろす建築中の高層マンションの最上階、2億円のモデルルームの窓から北京の初日の出を狙う。

分譲マンションとホテルを兼ねた巨大な建物は4棟、5月完成予定だそうだが、マンションはほぼ完売らしい。広報担当のイケメン兄さんが自慢する。

茜色に染まった空に黒い煙がたなびいている。大きな真っ赤な太陽が昇り始めた。

下を見下ろすと出稼ぎの労働者の黒い影が点々ともう動きはじめている。

2008年、元旦。中国はどう変わっていくのだろう。そして、日本は・・・スタジアムの前で記念写真を撮りあ

う若い男女が、はしゃいでいた。

☆

鈴木 嘉一

昨年、解説部の筆頭デスクから編集委員になり、取材・執筆活動に専念できる立場になりました。20年以上にわたってウオッチしてきた放送界だけでなく、映画や出版などメディア全般にも目配りし、解説やコラムなどを書いていきたいと思っています。埼玉大学教養学部の非常勤講師は10年を越えました。(読売新聞)

小田桐 誠

出版社を退職して29年目を迎える今年は、私自身も大きな曲がり角に直面しそうな予感がしています。モノ書きとしては久しぶりの著作を、編集長としては活気溢れる紙面充実を、大学講師としては新しい講義科目を、そしてBPO(放送倫理・番組向上機構)の「放送と青少年に関する委員会」委員としては、中学生モニターとのやりとりを楽しみたいと思っています。

心穏やかに、だがここぞという時は毅然とした言動で：どうぞよろしくお見守りください。(GALAC編集長)

以上は、寄せられた皆様の年賀状を要点整理して、皆様の近況報告とさせていたいただきました。

ありがとうございます。



# 第六回放送人句会

◇平成20年1月23日(水) ◇於：表屋

◇出席：伊藤視郎、鶴橋康夫、中村フミ、新村もと  
を、堀川とんこう、松尾馬笑、西川阿舟

◇不在投句：大山勝美

◇兼題：寒鰯、初々(初のつく新年の季語)、ドラ  
マ(的な内容で)

寒ブリの背 空の青海の青 とんこう(◎視)

肌は黄の線あざやかに鰯躍る 馬笑(◎康、視、も)

しばし手を裏表して初湯哉 馬笑(◎フ、と)

長崎はぶらりぶらりと初詣 視郎(◎も)

女優一人伊豫へ発ちたる七日かな 阿舟(◎と)

初雪や老いたる犬の思案顔 フミ(◎馬、康、も)

口中に寒鰯の刺ありありと 康夫(◎舟)

能登の旅鰯づくしこそよろしけれ 阿舟(視)

初富士を見せたい友のひとり減り 馬笑(視)

初夢を笑う女に嘘少し とんこう(視、康、フ、舟)

振り塩を脂が弾く寒の鰯 もとを(視、と、フ)

初電話話大きくなるばかり もとを(視、康、フ  
と)

乱闘に雪降りやまぬ野外劇 視郎(康、舟)

友の忌や筆とどこほる初句会 勝美(康、フ)

松過ぎて淋しき通夜の赤き海老 フミ(康、も、と)

蛸梅や風の浜辺を泣き通す とんこう(フ)

「完」が出て戻る書齋の寒さかな 馬笑(フ、と、  
舟)

一杯で一睡空に初霞

康夫(フ)

初旅も過客なりしか瓢湖にて 康夫(も、舟)

初茜世の動乱をほのめかす とんこう(も)

薩摩訛りなき篤姫の六日かな 阿舟(も)

初芝居目線怪しき雪之丞 阿舟(と、馬)

両腕に鰯一本を捧げ持ち 視郎(馬)

旅姿初富士に映えエンディング もとを(馬)

あざやかに五役海老蔵初舞台 勝美(馬)

初鏡への字の口にドラマあり フミ(馬)

初雪や傘は大判バーバリ 視郎(舟)

ジーンパンの膝を屈してミサ初め もとを(舟)

(一)内は選者。視||視郎、康||康夫、  
フ||フミ、も||もとを、と||とんこう、  
馬||馬笑、舟||阿舟、◎||特選

## 次回放送人句会

◇ 3月12日(水) 18・30

◇ 於：表屋

◇ 兼題：鱻(さより)、雛、現場

◇ 新しい参加者をお待ちしています。

## 08 放送人グランプリノミネートのお願い

今年も「放送人グランプリ」ノミネートの季節になりました。ノミネートの要領は例年と同じです。よろしくお願ひします。贈賞の対象は、主として07年4月から08年3月までの1年間で、テレビ・ラジオの企画・制作・演出、技術・美術などのスタッフ、編成、調査、研究、評論など放送に関わる活動のなかで最も顕著な仕事をしたと思われる人。

1、候補者は、グランプリ候補1名(個人)またはグループ)とその推薦理由。ほかに贈賞したい人(またはグループ)の名前、理由、適当と思われる賞のネーミング(特別賞、奨励賞など自由にお考えください)。

2、締め切りは08年3月31日。放送人の会事務局へFAXまたは郵送あるいはメールでお送りください。

3、ノミネートすることができるのは、放送人の会会員に限りませんが、対象者は会員に限りません。出身母体やジャンルにこだわらず広い視点でお考えください。

4、選考は、ノミネートの結果をもとに、選考委員の討論で内定し、幹事会で承認という例年通りのプロセスです。

5、5月の放送人の会総会と一緒に贈賞式を行います。



# 札幌発 ラジオの広場

雪をも溶かす、ラジオへの熱い思い

石井 彰

「名作の舞台裏 in 札幌」の終了後北海道制作者フォーラム・ラジオ分科会はテレビ制作者の分科会とわかれて小じんまり、それゆえじっくり語り合うことができた。

参加者は、地元ラジオ局からは、HBC 萬崎由美子、STV 大山洋・岡崎みどり、FM 北海道中田美知子・植松由起、FM ノースウェーブ中村巨樹、そしてコミュニティFM「らむれす」から木原くみこの7名。北海道のラジオはとって元気な女性たちが支えていることが、一目瞭然となる華やかさ。東京から松尾羊一、山路家子、そして放送番組センター専務理事の重定尚志、筆者の4名が参加した。

まず自己紹介を兼ねてラジオをめぐる環境、各局の現状や課題を報告してもらおう。司会を担当した中田さんによる地方ラジオ局が共有する経営と現場の現状分析と見事な切り回しが印象に残る。さすがギャラクシー賞DJパーソナリティー賞受賞者である。

北海道全体のラジオの現状は、総売上が10年前の80億から59億へと激減。聴取率(SIU)も10%台から8%台に下降するなど、厳しい状態が続いている。また、これからのラジオを担う、新しいパーソナリティーや制作者が育っていない。加えて高齢化の波がラジオ製作現場にも押し寄せている。

松尾さんは「昔の話だが、文化放送

で、時差を逆手にとって朝のニューヨークと電話回線をつなぎ、ゴールデンで生情報番組を放送したことがある。テレビマンユニオンのユニットとして生まれたのが「ニューヨーク・ホットライン」(78年)だった。この番組の企画は先日亡くなられた村木良彦さんのアイデアから誕生した」

(全盛のパーソナリティーラジオとは違うテイストでの模索番組。村木さんは坂元良江(P)小野憲次、市川陽(D)をスタッフに派遣してくれた。

飲みっぷりをみて私は即座にオノケンをアンカーに起用、NYからは楓セビルのレポート。ギャラクシー・期間選奨受賞。その後「ワールド・ホットライン」として報道部早朝ワイドに引き継がれた。まだ衛星通信は無く、海底電線通話の時代だった。付記松尾」

番組の企画を考える時に誰に相談するのか、つい狭い世界で考えがちなラジオ制作者には大きなヒントになったエピソードだと思う。

NHKで数多くのラジオ番組に携わった山路さんからはラジオを作る楽しさが語られ、また民放連から放送番組センターへと終始ラジオを注目されている重定氏からは「今の時代だから一日中、ずっと本を朗読する番組が作れないだろうか」という提言があった。

植松さんからは「若者がラジオを聴かない理由として、ラジオを聴いて場面を想像するのが疲れるから、と言われてショックを受けた」という体験も語られた。

映像が無いから想像する楽しさがあるラジオメディアで「想像するのが疲れる」という若者の出現は、ラジオの困難さを示しているといえるだろう。そんな中で北海道では、AM・FM、

各局の壁を越えて、在北海道の放送作家たちの集まる「北海道ラジオの会」と手をくんで「北のシナリオ大賞」を公募し、ラジオドラマ化して放送する試みを続けているというすばらしい実践も報告された。

若者は想像する楽しさに出会わないだけだ。若者の心にも届くラジオドラマを作り続けられれば、きつといつか、想像することの楽しさを実感してもらえないのではないだろうか。

ラジオの未来を切り拓くには、これまでと同じことをしていても駄目だろう。局の壁を越え、仕事のルーチン・ワークを超えて、新しいことに挑戦する(新規のスポンサーを捜し、抱き込むことも含め)ことが、いま求められている。参加者ひとり一人のラジオへの熱い思いを聴きながら「北海道にはその可能性がある」と確信した。(放送作家)

## 編集部

札幌で働く現場の皆さん、お忙しいさなか集まっていたいただき有り難うございました。まだまだ語り尽くせぬ雰囲気でしたが、俺にも(わたしにも)いわせて、そんな要望がありましたら是非寄稿してください。テレビとラジオの会報ですから。

## ◆ 新刊書紹介

### さらば卓袱台

テレビドラマの風景

守分寿男 著

気ままにネットをあけたらドラマ部門のラインナップ表が出ていた(未放送分)。tbsチャンネル(CS)スカーパーなど有料課金放送)の項でたままだらま『風船のあがる時』(72年)がリストに挙がっているのを見た。

おぼろげな記憶だが、札幌の冬季オリピックがテーマのドラマで、開会式に小学生の手で一万个の風船を大空に掲げようと懸命に駆け回る式典係の男五郎(フランキー堺)をめぐる夫婦愛の物語。開会式の仕事に夢中な男にはリルケの詩集を愛していた昔日の面影はない。結婚記念日も忘れてる。失意の妻(南田洋子)の揺れを軸に描かれた名作。この辺りから倉本聰・浦喜本宏(P)・守分寿男のトリオによる『ドラマのHBC』が生まれた。

「東芝日曜劇場」枠での『ばんえい』(73年)『りんりん』(74年)そして大滝秀治の『うちのホンカン』シリーズ、そして『幻の町』...。有島武郎、伊藤整、船山馨、原田康子、三浦綾子などを輩出した文学的風土を映像のイメージから彫琢したのが守分寿男であった。中央のドラマ事情からは欠落している「風土」から見据えた原日本人像を強く訴えている力作であり単なる回想の書ではない。

(かもがわ出版 2415円)

(M)



構成 久野浩平

今回は報道部門で活躍した放送人たちの「証言」を集めてみました。

まず 山室英男 さん。山室さんは一九五〇年放送記者としてNHK入局。最初は整理部の内勤でしたが同年秋、潜行中の共産党幹部 春日正一が逮捕、護送される列車にたまたま乗り合わせ名古屋から横浜までのロング・インタビューに成功し注目を集めます。五二年政治記者となり、総理官邸、平河クラブを担当。「証言」では五五年体制から沖繩返還交渉、佐藤首相退陣の記者会見など興味ある話題が続きます。七五年から七八年までヨーロッパ総局長として第一回のサミットを取材します。それらのエピソードも貴重ですが「証言」の中心は、長期間担当した「ニュース解説」です。その使命や意義を感じつつ立場の困難さ、視聴者の反応に対応する解説委員会のリベラルな空気などに触れます。

「結局、山室は山室の考え方以上に喋れない、喋れない。それでいて、NHKにご迷惑をかけることは、という際どいところをかくくぐって喋っていくわけですね。だから言葉遣いが一番大事で日本語の使い方、言いまわしこれはもう一番難しいことでしたね」

勝部領樹 さんも放送記者として五四年NHK入局し、松山局を経て「デンスケ」に電話、オートバイしかない「下関局に勤務、いきなり李承晩ラインの日本漁船拿捕事件に直面します。五九年AK社会部の遊軍に転属。「証言」は伊勢湾台風、六〇年安保、東京オリ

ンピックと、歴史的イベントや祭典の思い出を語ります。六六年は全日空、カナダ航空、BOACと航空機事故が続発。当時若手記者だった柳田邦男さんを起用、科学ドキュメント「謎の一瞬」「黒い画面」「空白の百十秒」が作られる経緯、話題はさらに大学紛争、アポロ11号月面着陸などに続き、全く新しいニュースワイド番組「ニュースセクター9時」の話題に入ります。磯村尚徳さんの後を引き継いで勝部さん自身もキャスターを勤めました。

「今の諸君は楽をしているというか、すごく羨ましい。例えばENGです。エレクトロニクス系の機器を全部使ってやれますわ。ENG取材ではカメラも小型化、(中略)それに携帯電話だつてある。例の、議事堂前の安保闘争の時にね、あれがあればすごく楽だったと思う。あれでボイス・レポートができますよ、現場から。『あ、いま女子学生が倒れています!』って」

宿谷礼一 さんは五二年七月開局準備中のラジオ東京(現TBS)入社。報道部に配属された一期生でした。報道部にはA、B二室あり、報道A室は朝、毎、読の三大新聞送稿の新聞記事をラジオ用にリライトするセクション、報道B室は「ラジオスケッチ」「マイクは探る」などの番組制作班で、録音取材の構成手法がやがてテレビドキュメンタリーに至る部署でした。B室所属の宿谷さんは五年のテレビ開局の前にテレビ報道に転属、五六年アメリカに派遣、CBSでテレビニュースのあり方を学び、テレビニュースの改革をめざします。そこでTBS系基幹五社のニュース協定、JNNネットを確

立し、六二年に田英夫をキャスターに迎え、テレビ初のワイドニュース「ニュースコープ」が誕生します。その準備に専念した宿谷さんの「証言」は、その経緯を詳しく語り、それは新聞支配下の報道A室の、テレビニュースのからの脱却だったと結論づけるのです。

「ニュースフィルムの後ろでアナウンサーがボショボショ原稿を読むのは、誰がこのニュースを話しているのか分からない。べつな言い方をすれば、ちゃんとした『人格』がニュースを喋るのでなければニュースに説得力があるまい、というのが、まず、そのアメリカ型のワイドニュースに踏み切る基本的認識だったですね」

次ぎは 村木良彦 さんです。村木さんは五九年TBS入社、ドラマ志望でした。六五年連続ドラマ「陽の当たる坂道」の演出では台本無しデイスカッション・シーンを毎回入れ、ドラマとドキュメンタリーの相乗効果を試み、話題を呼びました。六六年にワイドニュース「おはよう日本」チームに移動、萩元晴彦さんと共同演出で「あなたは・」を作り、芸術祭奨励賞を受賞。六七年報道部に転属、「現代の主役」「私は」など実験的ドキュメンタリーを連作し、「ハノイ・田英夫の証言」では殆ど生番組で芸術祭に挑戦する冒険を試みました。六八年村木さんは突然配転になり、TBS闘争がはじまります。「証言」は成田事件も含めその間の事情、労組主催ティーチインの空気などに触れます。結局村木さんは退社を余儀なくされ、それを機に設立したテレビマンユニオンの理想について示唆に満ちた「証言」となりました。

「『TBS50年史』(社史)の中にはですね、配転問題についての記述は無いんですよ。成田事件の経緯や田英夫さん辞任事件が起こった事情は詳しく書いてあるんだけど。(中略)ま、テレビで仕事をするとどういふことか、という局への基本的根源的なわたしの問いかけは重いでしょう。ええ、結局は無視されたかたちで、捨てられてしまったということですね」

残念なことには村木さんは、一月二十一日、雄闘半ばにしてお亡くなりになりました。謹んでご冥福を祈ります。

最後は 村野賢哉 さんです。村野さんは四六年NHK入局。理工系出身なので最初は技術局調整課に配属、「シンフォニーホール」「向こう三軒両隣り」などのミキサーを担当し、五一年編成局へ移動、五四年ビキニ環礁水爆実験による福竜丸事件が起こり、村野さんは放送特派員としてただ一人調査船に乗船、五十日間も放射能の洋上を取材します。この事件を契機にマスコミ各社は科学部門を開設することになったと言います。六一年からは解説委員、勝部さんの「証言」でも触れた連続航空機墜落事故、六九年アポロ11号月面着陸中継で話題を呼んだレポートと先駆的な科学解説の「証言」は貴重です。

「教育テレビの領域だった科学番組を総合テレビから出すのは僕の願望でした。(中略)今では例えば『ためしにガッテン』という科学番組をやっているでしょう。(中略)慎重な準備に時間がかかり、制作者自身がアイデアをだしあっている結果の番組だと思っ



## 村木良彦氏追悼

# 赤い夕陽と紙。パンツ

大山勝美

故村木良彦氏の通夜（お清めの席）で「遺影はカッコ良かったな」と言う知人がいた。ディレクターとして現場で手で指図しているポーズである。合槌を打ちながら、私はTBS時代の彼のADぶりを思い出していた。

昭和38年芸術祭参加番組「正塚の婆さん」（橋本忍脚本）を演出したとき、AD陣は鴨下信一、実相寺昭雄、高橋一郎、村木良彦、久世光彦だった。その日は新宿三丁目の寺を主役の三益愛子が孫とお参りする簡単なシーンの収録で、高橋、実相寺の二人は次の場面の準備にかかり、現場は村木、久世の二人きり。私の悪いクセで、おもいつきで都電入れこみの人物を撮りたいと言いつつ、急遽カメラを撮影無許可の車道に持ち出すことになった。

俳優が動きのリハーサルを行うと、一寸した人だかりが出来た。久世は三益愛子連れて喫茶店に一時避難。「村木さん、お巡り見張つて下さいよ」と言い現場を離れる。当時は大型中継車を持ち出しているロケだから、現場との連絡はインカムだけが頼りである。

見物客も減ったし撮影再開するかというとき、中継者を叩く者がいる。村木であった。「お巡りきた」。うしろに怒った顔の警

官が立っている。「許可書はあるか」との質問である。私はインカムで「久世を呼べ！」となった。

すつとんできた久世は空気を読むと警官にクドクドと説明をはじめた。じりじりの中継車から警官を遠ざけようとする。「それつ」と私たちは小声で本番準備をはじめ、手早く撮影を終えた。密かにサインを受け



取った久世は「すみません。じゃ撮影はやめます」と警官に頭をさげ、「撤収！」と叫んだ。

久世は後年、ADの現場仕切りのいい例悪い例として「お巡り来た」事件を面白おかしく披露していたという。

「衝突コブ事件」というのもあった。昭和39年「あとは野となれ」収録のときである。自転車に乗った渡辺美佐子の表情を狙うため、軽トラクに自転車ごと載せて撮っ

た。村木がチーフADである。

彼は軽トラの荷台から半身のり出し、私の指示をドライバーに伝える役である。カメラは16ミリのアリフレックス。撮影は順調に進行中、いきなり軽トラが急ブレーキをかけて止まった。「危ない！」とスタッフはカメラと俳優を押さえ込み無事だったが、村木が倒れこんでいる。頭に切り傷とコブが出来ている。近くの病院に運んで診てもらおうと大したことなく、ホツとした。

しかし撮り残しが出て、ロケが一日ふえた。そのため私は渡辺と結婚する流れになったのだから忘れ難いコブ事件となった。

村木良彦の「テレビマンユニオン誕生」はきりつとした名文である。二度の配置転換に発奮してTBSを退社、独立して生涯現場で番組を作りたという執念が核になり、25名の仲間たちを集めてゆくのだ。彼は通院している病院の窓から、燃えるような赤い夕陽を見つめているうちに、フリーへの決意をたぎらせてゆく。

彼はこう書いている。「テレビマンユニオンは、さまざまな異なる方法論を持ったテレビ制作者が、ひとりひとりそれぞれ思いを持ちながら、激しく競い合い、刺戟し合いつつ『テレビ的方法を探究する』という一点を共有する共同体である」。

彼は酒が好きで強かった。黙々とグラスを口に運び、崩れた姿勢をみせたことはなかった。時折り人なつこい笑顔をみせて人を和ませた。

80年代、そんな酒好きの放送人が団を組んで、文化大革命後の中国各地の放送局を指導と称して3、4回まわったことが

ある。吉田直哉、堂本暁子、志賀信夫といったメンバーたちで、中国の定番朝食「油条」にちなんで「油条会」と称していた。

村木氏の旅荷物は、メンバーの中でも目だつて小ぶりだった。秘密は下着にあった。彼は使い捨ての紙製のシャツ、パンツを持参していたのである。

80年代後半、第1次ニューメディアの時代である。彼と志賀信夫氏の二人が、渋谷ビデオスタジオの一室を拠点にして、若い人を対象の「メディアワークショップ」を創設した。おくれて私も参加してディレクターコースを担当して数年続けたことがある。

彼の通夜に、かつての熟生が10数人集まつて懐旧談になった。その一人が昨年の暮、入院中の村木氏を見舞ったとき、「昨日、大山さんが持つてきてくれたんだ」と手にした本をみせたという。加島祥造の詩集「求めない」である。「求めない」として身体が軽くなる 楽になる 何かが変わる」といった我執や欲望を離れてみるこの精神の豊かさを詠んだ詩集である。

求めない  
—すると驚きの心が目をさます

赤い夕陽と紙。パンツ。情熱的ロマン主義と現実的合理主義を併存させる大きさが彼にはあった。整然とした理念と多くの現場体験、メディアへの熱い思い。そして若い制作者たちへの声援を決して忘れることのない放送人であった。



事務局は月、水、金（13・005・18・00）営業です。

会員名簿 08・02・08現在

- (あ) 合川明 青木裕子 赤井朱美  
秋田完 新井和子 有馬哲夫 (い)  
石井清司 石井ふく子 石井彰  
石橋冠 磯野恭子 磯村健二  
市岡康子 一色伸夫 伊藤雅浩  
井上良介 岩澤敏 岩下恒夫
- (う) 上田千秋 碓井広義  
歌田勝彦 宇野昭 浦田彰  
(え) 江口展之 遠藤利男  
遠藤ふき子 遠藤雅充
- (お) 大蔵雄之助 太田敬雄  
大野木直之 大西康司 大西文一郎  
大原誠 大原れいこ 大山勝美  
大類啓 大脇明 岡弘道 岡崎栄  
岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明  
小河原正己 沖野瞭 荻野慶人  
小田久栄門 (か) 加賀美幸子  
各務孝 片岡敬司 片島紀男  
勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫  
金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀  
加納孝夫 上安平冽子 鴨下信一  
川口健一 川口幹夫 川竹和夫  
川平朝清 河邑厚徳 河村正一  
(き) 岸田功 北川泰三 北川信  
北出晃 北村美憲 北村充史  
木村栄文 木村成忠  
(く) 楠美昌 工藤英博  
隈部紀生
- (こ) 小池勝次郎 河野尚行  
児玉久男 児玉孝光 後藤和晃  
小中陽太郎 小南武朗 近藤晋  
今野勉 (さ) 斎藤伸久 斎藤秀夫  
斎明寺以玖子 酒井美樹男  
寒河江正 坂元良江 桜井均  
桜井元雄 佐々木欽三 佐々木彰  
佐藤秀山 佐藤年 佐藤利明  
沢口真生 澤田隆治 沢田隆三  
(し) 重延浩 重村一 静永純一  
嶋田親一 清水満 下重暁子  
城菊子
- (す) 菅野高至 杉澤陽太郎  
杉田成道 鈴木克明 鈴木昭典  
鈴木道明 鈴木紀郎 鈴木典之  
須磨章 せんぼんよしこ  
(そ) 曾根英二 (た) 高島秀之  
高橋一郎 高橋啓 滝大作  
武谷雅博 田澤正稔 田中昭男  
田中直人 田原英二 田原茂行  
(ち) 千葉勉  
(つ) 露木茂 鶴橋康夫  
(と) 土居原作郎 戸田桂太  
外崎宏司 富永卓二 土門正夫  
堂本暁子
- (な) 中崎清栄 中澤忠正  
中島僚 中田美知子 中谷英世  
長沼士朗 中村敦夫 中村克史  
中村季恵 中村耕治 中村美美子  
中山和記 難波秀哉
- (に) 西川章 新村もとを  
西ヶ谷秀夫 丹羽美之  
(の) 野崎茂 信井文夫  
(は) 萩野靖乃 橋本潔 林健嗣  
林裕史 原由美子 原田庸之助  
(ひ) 備前島文夫 久野浩平  
一杉丈夫 (ふ) 深町幸男  
福田雅子 藤井潔 藤井チズ子  
藤田晋也 藤久ミネ  
(ほ) 星田良子 堀川とんこう  
(ま) 松尾羊一 松平定知  
松前洋一 松本明 松本修  
松本国昭
- (み) 三上義智 水上毅 水野憲一  
満島保夫 三村景一 三村千鶴  
宮川鏡一 三宅恭次 宮脇巖雄  
明神正
- (む) 村上光一 村上憲男  
村上雅通 村上佑二 村田亨  
(も) 守分寿男 諸橋毅一  
(や) 八木康夫 矢島良彰  
藪内広之 山泉昭彦 山崎隆保  
山崎裕 山路家子 山田良明  
山田尚 大和定次 山根基世  
山辺麻未 山本恵三  
(ゆ) 湯浅和憲 (よ) 横沢彪  
横山英治 吉澤保 吉永春子  
吉村直樹 吉村光夫  
(わ) 和田智允 渡辺敏史

☆ 入会希望の方は事務局（☎322110019）までお問い合わせください。

編集後記

冠婚葬祭。周知のように冠とは息子

や一族郎党の元服式に立ち会う目出度

いセレモニをいう。当節では子供た

ちの成人式か、孫の入学式などが冠に

相当しよう◆婚は職場のアノコ、やつ

と片付いたなあ。お祝儀を弾むか、て

なお噂もめつきり減り、適齢期世代と

の交流が薄いから昨今では婚の字には

縁がなくなつた。一応範疇に入りそう

な出版記念会とやらも、どこそこのテ

レビ局の新年会にもすつかり縁遠く、

第一面倒くさい。ドブねずみ色を着込

んだ後輩幹部連のはしやぎようが鬱陶

しいと、年寄りにはひがむ◆では祭り

はどうだろうか？ 放送業界の祭りはパ

ーティーであるが、バブルがはじけて

以後はめつきり減つた。虚礼廃止は結

構。いやテレビは毎日が祭りのような

ハデハデな番組を流してる。そういえ

ば今年も深川は富岡八幡様の本祭りだ

がこの歳で神輿のかつき手というわけ

にはいかない。昔も今も祭りは若者の

領域で、幼老が困むものだ◆とどのつ

まり冠婚葬祭にみるドラマのクライマッ

クスは「葬」なのだ。人間関係を理で

はなく情に則した別れの終幕。残つた

者たちが通夜に集い、故人を偲ぶ：：◆

村木さんの遺影は斜に構え、何かを  
仰ぎ、視線の先にある何ものをかすか  
な微笑で見つめていた。

合掌